



Title	東北メディア
Author(s)	松本, 和也
Citation	太宰治スタディーズ. 2008, 2, p. 18-21
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/102886
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

追悼文を読む

「東北メディア」

松本和也

東北メディアでの追悼文について、ここでは「東北文学」の「追想の太宰治 特集」（一九四八・八）と、「月刊東奥」の「太宰治追悼記」（一九四八・八）の二つに絞って検討していく。
 まず「東北文学」からみていくならば、宮崎泰二郎「編集手帖」に謳われているように「東北的性格をニュアンスにした「太宰治の追想」」であるところにその最大の特徴がある。それは何より、地の利を生かした執筆陣によって保証されるべきもので、「太宰治氏の永い時の間の友、数小さい心の友は誰で何處にいたか。その文学、その悲痛の人間行路をよく理解出来、太宰の友——として変らなかつた人々によつて本号の特集は編まれ」ることで、成立している。

「太宰治とともに親近な作家の一人であつた」と紹介される田中英光の「太宰治先生に」は、太宰治に宛てた書簡の形式をとり、太宰死後のジャーナリズムの動向や周囲の人々の様相を批判的に点描しながら、「頽廃作家、ニヒリスト、実存主義者、肉体作家。あなたの上に、いろいろなレツテルを貼るのは、みんな嘘だ」と指摘する。その上で田中は、「あなたは、太宰治文学というものを、少く共、日本文学史上に残して死なれた」と評価し、「あなたの文学は、これからイヨイヨ、生命力に溢れ、生き続けるでしょう。ぼくも、エピゴオネンといわれたつて、糞喰え。あなたがぼくの中に残して下さつた、文学の根を懸命に育ててゆく積りであります」と、文学的後継者を自認して精進を誓う。「河北新報社員某氏」（三原良吉か村上辰雄か宮崎泰一郎／山内祥史氏推定）と紹介される吉邨堯の「惜別」のころは、生前三回訪れたという「太宰治と仙台」との「結び目」を軸に展開される回想記で、中でも『惜別』執筆のための取材時の太宰の姿が丹念に描かれている。そして、「太宰といえば、原稿を書いている以外は、したたかの酒仙として、深酒にひたつてゐる風秉」が想起される、その「対照的な反面」に光りをあてる。つまり、ともすると見すごされがちな太宰の「くそ勉強に集注し没頭するバルザックのような粘着力」に注意を喚起されている。「河北新報文化局長、仕事をはなれても太宰治との交情は深かつた……」と紹介される村上辰雄「終戦直後の金木町にて」は、標題通り罹災して金木の生家に帰京した時期の太宰を描いた回想記で、依頼から原稿を受け取り、出版に至るまでの、太宰にとつて初の新聞連載小説『パンドラの匣』（初出「河北新報」）をめぐる挿話が中心に据えられている。「太宰治のもつとも年少の親友であり、また数少い弟子とも呼ぶべ

きものの一人」である戸石泰一による「仙台・三鷹・葬儀」は、表題に掲げられた三つの場所を舞台に、会話の再現を多用したごく私的な交友から葬儀の様子までを、感傷的な筆致で綴った一文である。「画家で太宰治の郷土における懇親な旧友」と紹介される阿部合成は、太宰治『女性』（博文館、一九四二・六）の装幀も担当した画家であるが、「友！ 太宰治」という一文を寄せている。そこで阿部は、太宰の死を聞き知った衝撃からこれまでの交友を振り返り、「私にとつては生涯の、かけ換えのない友人」だつたとして太宰を悼む。「本誌連載の『文壇録音』で毎月好評の批評家」である山沢種樹は、「アヴァン・ギャルドの宿命」で太宰の死にふれた後、「日本文学の中に、これほど独自に開花した文学はなかつた」と評す。その上で、「太宰文学の壮絶を探らうとするならば、先づビブリオグラフィによるのが捷径であらう」として作品史を追い、その軌跡を「太宰治その人たゞ一人、前にも後にもたゞ一人の苦難の道」だとして、それを「アヴァン・ギャルドの光榮」と称す。「太宰治の親友で新人作家として注目されている」と紹介された小山清が寄せた「三鷹綺譚」——太宰治氏がこの作品につけた題名は『メフィスト』だつたが——は、自ら「楽屋落ち」と称す太宰との交流を書いた創作で、太宰の疎開中に三鷹で書き、その後太宰に預けたままになっていたものだという。

こうしてみてくるならば、この特集に寄せられた七つの文章は、いずれも新聞報道に代表されるジャーナリズムが描き出す、多分に好奇心に満ちた外側からのまなざしとは対照的な性質をもつことは明らかだろう。そうではなく、太宰治をその故郷、私生活、文学といつたいわば内側から理解しようと努め、それぞれの記憶・交友に即しながら「私にとつての太宰治」を描き出したものといえるだろう。

続いて「月刊東奥」に目を向けてみよう。下山俊三「編集あとがき」には次のように記されている。

☆：『自虐精神』で若い青年層に圧倒的な人気のあつた作家太宰治氏が自殺した。戦後生活のよりどころを失い兇暴な眼が至るところに光つている世代に、太宰の文学はその主題、その描写がふさわしい。本県の生んだ作家として本号では彼の生活、文学、思想などについて十数氏から原稿を集めて特集とした。

さらに、「週刊、月刊雑誌などの太宰特集は多かつたが、太宰氏の郷里で、編集した太宰追悼号の決定版

はこれだぞとひそかにうぬぼれている次第だ」という自負もみられ、中央を意識した青森発の特集企画ではあつたことがうかがわれる。

青森市出身の作家である北畠八穂は「冬の旅終りぬ」で、十四年前、大学生だった太宰の風貌を思い返しては、戦後太宰がみせた配慮（住居の手配）にふれた後、その死を悼む。「太宰治が情死したとき私は嘘のように感じた」と書き起こされる「狂い咲きの花」で丹羽文雄は、作家としての太宰に肉薄し、「彼の作風は二十代の文学青年をとらえるのにもつて来いで、彼等の代弁者の觀がした」と評しながら、「若さは貴いが、しかし私はそういう太宰の作家態度には不満である」と難じ、年相応の「前進」を求める。「太宰治の文学」を書いた評論家の板垣直子も、太宰が『青年』に支持されたことに論及し、「彼（太宰治／引用者注）の絶望と反抗的な心持が、抒情性をおびた才筆で綴られた時、当時の多くの青年達に反響しないでいなかつた」・「才氣と文章が青年の読者を獲得した。そして、太宰は最後までインテリ青年の一部に支持された」と同様の指摘をしている。作家・沙和宋一「性得の宿命——『晩年』へつながる純潔——」は、太宰死後の途惑いを吐露しながら、「太宰文学形成の根本的な秘密」を『晩年』以前に求め、セルゲイ・エセイニンの詩を太宰の靈に捧げる。東奥日報社出版部長の下山俊三は、「不惑ならず」で、文学者としての太宰の死を惜しみながらも、「一箇の社会人としての常識」からみれば「わがままだ」と非難を憚らず、「妻以外の女と一緒に死ぬことは、作家として名声ある彼故に、死後の影響が大きい」と危惧している。太宰と姻戚関係にある雨森卓三郎の「幼き日の太宰治」では、幼き日の太宰を囲む家族の肖像から、小学校での優等生ぶりまでが点描される。「東北文学」の特集にも寄稿していた阿部合成は「太宰治よ安かれ」を書き、「彼の死を最後に報ぜられて以来、私は自分の体の中にいきなり空洞を空けられた想いがする」という。それでもなお、「彼の文学はそのままそつくり太宰治の克明で、軽快な彫刻である。只、よみさえすればよい」として、太宰の芸術に惜しみなく讀辞を送る。当時青森県労働部長の職にあつた千葉元江は「級友、太宰」で、「弘前高校学校文科甲類二年生」として同級であつた時代の太宰を振り返り、「自己分裂」にも似た「急流の様な突進力」とプライドに、後年の作風や心中に通じるものを見出している。高校時代の恩師である、弘前高等学校英文学教授・久野真吉も太宰の「一貫した創作態度」に注目し、やはり

当時から『斜陽』に至るまで「人生に対する捕らわれない見方、それを表現する素直な技巧は一貫している」と認める。太宰が心中未遂と縊死未遂とを図った頃、監督者として同じ家に住んでいた福島民報社長・飛島定城は、「二つの世界 文学以前の太宰君のこと」で、太宰（の死）は他人の「物さし」でははかれず、「太宰治という『人間』は彼の持つている物さし」でしかはかれないのである。いわゆるファンの立場からは、戦後、金木の生家で初めてあって以来太宰と交流をもつてきただといふ大高正博が、文学者以上に「一介の生活人の方が（太宰治の／引用者注）おかげを蒙つたのではあるまいか」という視点を提示している。弘前麦書房房主の松木寿三郎は「石」で、太宰の作品を「清冽な谷川の水に洗われてゐる宝石のように、あやしいまで、かなしく光っています」と顕揚する。かつて太宰も加わつていた同人雑誌「座標」の淡谷悠蔵は、「肉親への愛憎 津島文治さんへ」で、津島文治への書簡という体裁で、弟の死がもたらした衝撃を思いやりながら兄弟それぞれの人生を描き出す。太宰と弘高で同窓だった津川武一は「内向的分裂氣質・太宰の性格…」で、「太宰治の自殺の本質」をとく「鍵」として「彼の性格」と「彼をとりまいた社会」とを指摘する。「二十年前から太宰氏と親交があり、故人と同じ三鷹町に居住していた」と紹介される作家の今官一は「津軽へ寄せる詞——太宰治と『二十代のアポロ』に就て」を書き、表題通り、津軽に「あなたの胸の掟に従えば、放蕩無賴の伴だつたかもしだぬが、帰るところは、あなたの胸、ふところのほかにはないのだ。津軽よ。肩をだいて、温めてやつて下さい。」と呼びかける。そして、「少くとも、彼が、この世に書き綴つた、いくつかの『青春』は、如何なる場合にも、よみがえりの声となつて、必ずや、末世の汚濁にめくらめく人たちの心に、強い反省と、審きをもたらすでありましょう。」といった意味で『太宰治』の復活を信じ、「津軽は、彼の故郷にふさわしく絶対に、彼に対して、礼を失してはなりません。』とその一文を締め括つてゐる。

類似したコンセプトで組まれた「東北文学」に比すならば、幼少期から弘高時代、そしてその後も太宰の核を成していたと思われる津軽人としてのアイデンティティがよりクローズアップされたのが、この「月刊東奥」の「太宰治追悼記」の特徴であるといえるだろう。

双方とも、『私にとつての太宰治』を書き出すことで、数多の太宰特集との差異化が図られていたのだ。